

キャピタル「TOKYO」：丸の内 シンボル「TOKYO」：東京タワー

2007.3.20

奥中 顕子+服部 祐介+小川 祐樹

■キャピタル「TOKYO」：「丸の内」

「丸の内」の価値は、明治時代までさかのぼるビジネス街としての歴史性にある。お雇い外国人建築家ジョサイア・コンドルの指導の下、ロンドンのロンバート街区を倣して作られた赤煉瓦作りのビジネス街が「丸の内」の始まりだ。その後、1914年に東京駅、1923年に丸ビルが竣工、ビジネス街として急速な発展をとげ、60年代には煉瓦街の改築が進み100尺（31m）の高さにそろったビルが立ち並び、悠然とした近代都市景観を形成していく。近年は、三菱地所主導の再開発によって、商業を取り入れた都市計画がなされ、多様な人々に開かれつつある新しい街として注目を集めているのはご存知の通りだ。この再開発にあたっては、歴史的建造物や景観の保存が大きな話題となった。公共と民間によるまちづくりのために「大手町・丸の内・有楽町地区まちづくり懇談会」が平成8年に発足し、そこで取りまとめられた『まちづくりガイドライン』（平成12年）では、「丸の内、有楽町の街並みを形成する軸（主要な通り）については、（中略）歴史的な（100尺）31mのスカイラインを表情線等として今後とも継承していく。」と言及されている。調査では、特にこの31mのスカイラインに着目した。

「東京」という言葉は、地名をすら超えてもはや想像の共同体と言ってもいい。さあ「東京」を調査するぞと考えたときに、ふとそう思った。そして我々は世界に語られるべき「TOKYO」の光を探した。今回は、キャピタル「TOKYO」としての歴史を歩んできた街「丸の内」と、シンボル「TOKYO」として君臨する「東京タワー」から望む夜景のパノラマを調査した。まずは丸の内の報告から・・・



昭和初期の丸の内



ランチタイムの仲通り



まったりと明るい夜の仲通り

ランチタイムには歩行者天国となる仲通りは、パースペクティブの効いた31mのスカイラインが展開されていて、洗練された景観を作っていた。この31mのスカイラインは幅員の大きい歩道と相まって、背の高いスカイスクレイパーのセットバックを強調し、切り取られた空は狭いながら不思議な開放感があった。



「一丁倫敦」と呼ばれた明治期の仲通り

一方、夜の仲通りは、工事車両がせわしく往来していて、「丸の内いまだ開発中」の様相だった。この光の主な構成要素としては、32mピッチで干鳥に配置されたりフレクター型のポール灯（メタルハライドランプ250W）が照らす路面、アップライト（FHT32W）によって照らしあげられた百合の木、そしてショーウィンドーからのもれ光だった。どれも色温度は3000～3500K程度で、演色性は非常に良いと思われた。個々の店舗の看板が目立つこともなく、全体的に紳士的な雰囲気だ。路面照度は20lx～180lx程度と、歩道としては高く、反射率の高い煉瓦で敷き詰められた路面は、明るさを十分に確保していた。鉛直面も、反射率の高い建築仕上げによって、受けた光を素直に発散させていた。路面、鉛直面が明るい分、狭い空はどっしりと黒く感じられた。グレアに気を遣っていることは感じられるのだが、まったりとしたコントラストの少ない空間を歩いていると、生ぬるい風呂に使っているようで、上品というよりは異様な感覚を覚えた。それは、午後8時だというのにすでに閑散として、街が活動している様子が見られなかったからなのかもしれない。この環境に渋谷ほどの人が加わると、印象はまたがらりと変わるのだろう。屋には効果的だった31mのスカイラインはというと、「丸ビル」「明治安田生命」「日本工業倶楽部」「日生ビル」は自分のスカイラインを上品に主張していたが、街全体に連続するには及ばず、イメージしていた光のスカイラインは期待していたほど得られていなかった。



日比谷濠から見た威厳のある31mスカイライン

皇居側日比谷通りからの丸の内の遠景は、超高層ビルを背景として、ファサードを31mのスカイラインでそろえられており、古典主義的近代ビルの威厳を彷彿とさせていて圧巻だった。外堀から眺望するこの強いスカイラインが、単体としては単純な構成の建造物に付加価値を与えていて、これは世界を探してもなかなかお目にかかれる景観ではないだろうかと思った。しかし夜には、その面影は消え、煌々と光を漏らすオフィスビルの四角い窓と、まぶしさむき出しのポール灯が、ただただ広大な闇となっている皇居と対比されてひととき際立っているだけだった。このように、昼間は景観の演出に効果的な31mのスカイラインも、夜となるとその姿を隠していた。夜の「丸の内」の光は、ヒューマンスケールを超えて高くそびえるスカイスクレイパーの四角い窓や、天井に埋め込まれたむき出しの蛍光灯という体温のないような光だけで、夜の景観があまり考慮されていないのではないかという結論に至った。これは、丸の内がまだ形式的なオフィス街からの脱却しきれていないことを意味するのだと思う。あるいは、あまり煌々と明るい街とするのは、対面する皇居に対する不敬だと考えているのかもしれないが、それも光のデザインのやり方によっては解決可能な問題だと思った。

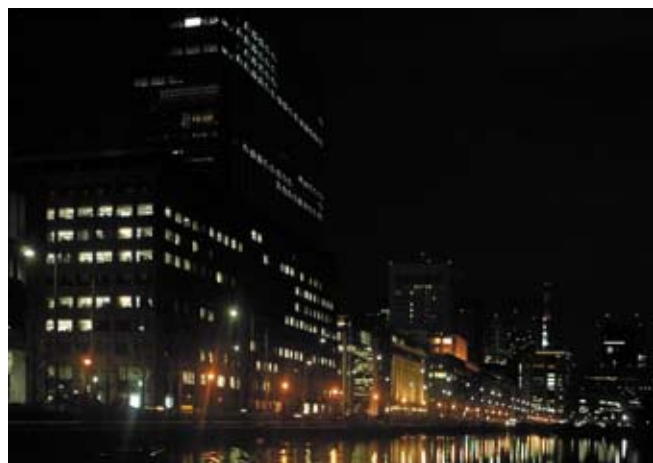


光の31mライン（丸の内MY PLAZA）

「新丸ビル」の竣工（2007年4月）、「三菱一号館」の復元（2009年予定）と、これからさらなる進化を遂げるオフィス街「丸の内」は、その敷地のほとんどを一つの地主が所有しているという、都市計画や景観について考える上でこの上なく恵まれた環境にある。歴史ある建造物群や熟慮された都市計画など、この街は世界でも類まれなるポテンシャルを持ち合わせているのだから、ガイドラインに夜景も考慮することで、「丸の内」の価値はさらなる昇華を遂げるのだと思うとやまないのだった。



画一化された天井の蛍光灯がファサードライトアップと共存する



夜はポール灯に身を隠すファサード

■シンボル「TOKYO」:「東京タワー」

「日本電波塔」、通称「東京タワー」は「東京」の代表的なシンボルだと言いつつ切ってしまう。その存在感たるや、「東京」の“ヘソ”とも呼べるかもしれない。小説、歌、映画、はたまたジンクスにまで登場するほど愛される、この高さ 333 m の鉄塔「東京タワー」は、1958 年の竣工後、高度経済成長、バブル崩壊と激動の昭和を経て現在に至るまで、「東京」を見守り続けている。今回の調査で我々は、半径 100 km 圏内に電波を飛ばし続けるこの立地が、「東京」の夜景のパノラマを語るに相応しいのではと思い、この朱色の鉄塔が見続けている夜の「東京」を俯瞰してみた。(ライトアップに関する詳細は HP を参照)

「東京タワー」の展望台の高さは 250 m、六本木ヒルズの展望スペースと同程度の高さだ。展望台では今宵を満喫しているアベック達の邪魔にならぬように気を遣いつつ撮影を敢行した。目下に広がる光の粒は、広大な関東平野を埋め尽くし、「東京」のダイナミズムを無言のうちに表現していた。蛍光灯、ネオン、ナトリウム、ハロゲン、LED、etc. あらゆる光源のあらゆる光色の粒が点在している様子には、やはりカオスティックなアジアを感じるのだった。空と地との境界に目をやると、東京では見ることはできない遥か彼方の地平線が、点が点を結んで“光平線”となって見ることができた。あの煌めきはどこから来ているのだろうかと思う感覚は、無数に広がる夜空の星を見上げて、宇宙的な空想に想いふけるのとほとんど変わらないものだった。大都市に埋没した個としての自分の存在に気付き寂しくなる感覚。しかし、この光の粒ひとつひとつに一千万人の消息を感じると、心なしか救われた気持ちもするのだった。省エネの見地から、批判されるべきギラギラした「東京」の夜景と言われるが、無作為に散りばめられた圧倒的な光の粒の美しさは、はっと息を呑むほどだった。



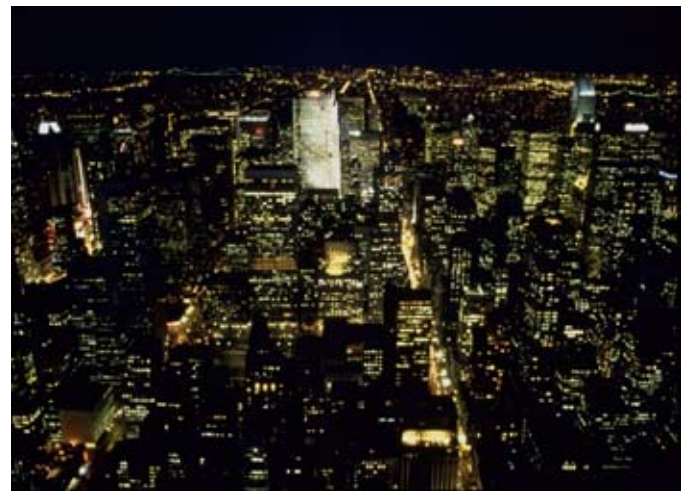
東京代表・東京タワーこと「日本電波塔」

さて、様々な都市の夜景の俯瞰写真を思い起こして「東京」の夜景の特徴について考えることにする。夜景というのは、およそ光の粒の集合や分散のしかたで語られる。まず、「東京」の夜景は他の代表的都市のそれと比べて、粒の絶対量が圧倒的に多く、無造作に撒き散らした米粒のようにランダムに分散していると思った。これには様々な原因が推測される。まず、露出した地表面が少ないこと。高さ 250 m から見える夜景には、皇居と東京湾だけがぽっかりと真っ黒い落とし穴を開けていた。次に、道が見えにくいので、直線的な光の筋がほとんど見えないこと。自動車のヘッドランプやテールランプは、夜景を形成する要素の代表選手だが、周辺の建造物が高く密集していることで歩車道のポール灯の光とともに、自動車の光も隠れ、光の粒はひときわその存在感を示すのではないかと考えた。東京の道路が直線ではなく湾

曲したものが多く関係しているかもしれない。もう一つは、建造物の面積が小さく、建蔽率が高いこと。小さく分譲売却される高価な土地の有効利用策として、東京の建物は細長いビルが所狭しと密集している。本来、夜は真っ黒になっているはずの屋根や屋上も、圧倒的な光の粒子の中に埋没するのではないかと考えた。地表面が見えないということは、鉛直面を見ていることに他ならない。そう、光粒の正体のほとんどは、建物の開口部から発せられる輝度だったのだ。高さ 250 m から見た東京の夜景は、照らされたビルトップやファサード、ネオンサインをも飲み込んでしまうほど圧倒的な窓からのもれ光の集合体なのだと言えよう。ガラスという建築素材としては古い材料が、今では都市の夜景を支えているのだ。



シンガポは電球色の道筋がバースを描く



ニューヨークは屋上の闇が目立つ



ビルで休息する紅の蛍

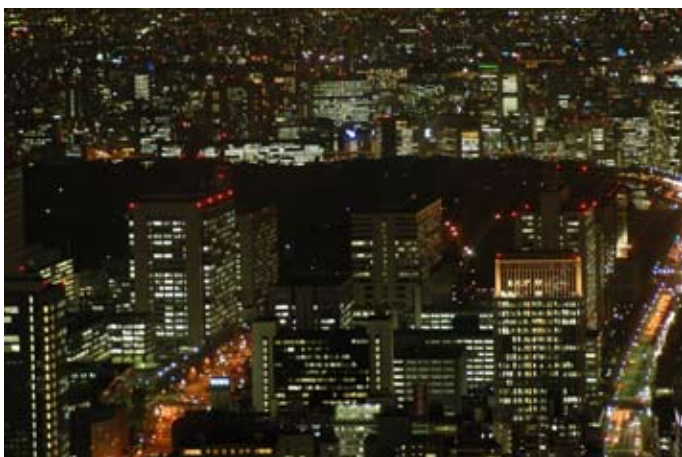
さらに「東京」の夜景を構成する要素として、国土交通省令で定められている航空障害灯は特筆すべき光だろう。一つ一つが確かなリズムで明滅する紅の光は、思い思いに休息しているホテルのようだった。高いビルがよほど居心地良いのだろうか。写真では彼らの瞬きの全容を報告することができないことが残念だ。本来、夜景を説明するとき、それは映像でもってしかるべきなのかもしれない。夜景は時々刻々と変化してじっとしていない。それは、制御されているわけではなく、太陽が東から昇り西に沈むような自然の運びと同じように、労働、食事、就寝という人間本来の生態サイクルが夜景を動かしているからだ。

展望台から地上に降り、「東京タワー」をあとにした。今まで見ていた夜景の一部に吸収されていく。ふと振り返ると、「東京タワー」は我々の背中を押すように悠然とそびえ立っていた。都心を歩いているとき、ふと注意を払うと「東京タワー」はそこにいる。かつて「エッフェル塔」が建てられたとき、パリに住むひとりのお爺さんが、塔のレストランに毎日訪れたという。それは塔がお気に入りだったわけではなく、どこからも見える鉄骨むき出しの塔を、見たくないからだったという話を思い出した。塔という存在はそれほどまでに都市景観を支配する。今日、「東京タワー」を含んだ景観は、東京の代表的なものとなり、大都市に息づいているが、地上デジタル化に伴い、その役目を終えようとしており、代わって墨田区に「新東京タワー」の建設が構想されている。そして、また新たな「東京」の夜景として人々の心に浸透していくのだろうか。

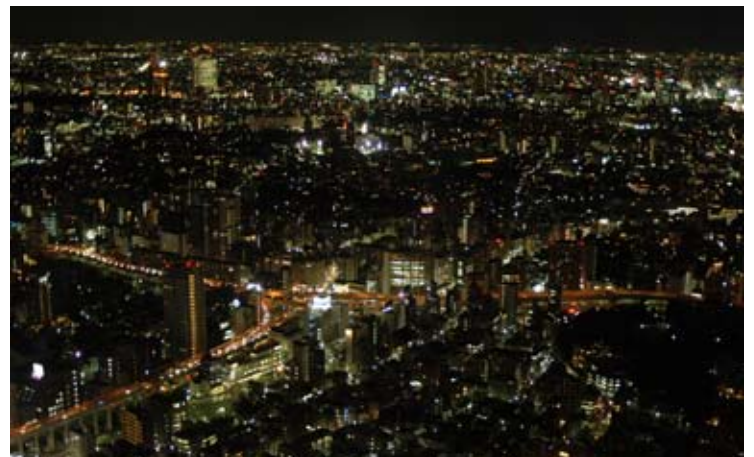
(服部祐介)



夜の銀座からあふれる欲望の光塊



光の中にうずくまる皇居の間



宇宙

第31回街歩き

多要素のコンパクトなポートタウン豊洲

2007.2.16

集合住宅の開発が進む中で、大規模商業施設や大学のキャンパスのオープンも相次ぎ、近年注目を浴びている豊洲地区。最新の都市計画のモデルケースともいわれる現在の豊洲で、2月の寒風吹きすさぶ中街歩きが行われました。

■道路照明の観察

豊洲駅のららぽーとに一番近い出口に集合した探偵団は、まず手始めに、日頃はなかなか光の主役として意識しない道路照明に着目しながら街区を歩きました。ポール灯の高さや形状、設置間隔、消費電力などを実測、またはポール灯に表記されている情報を集めていくと、それぞれの道幅に合わせてポール灯設置の計画がされていることが見えてきます。面出団長が各ポイントにてグレアカットの問題などをコメントされ、団員の皆さんがそれを熱心にノートにとっていったのが印象的でした。第3街区を歩いている頃の5時15分に周辺の道路照明が点灯すると、車道と歩道の照明の色温度が異なっており、通常の計画でなされるものではないため、皆でこれは何でだろうと首をかしげるシーンもありました。



晴海通りららぽーと前にて



2005年オープンの芝浦工大

■集合住宅、オフィス、芝浦工業大学豊洲キャンパス

開発の真っ只中の豊洲では空地が多いために、高層のオフィスや集合住宅の全景がさほど離れたところからでなくとも見ることが出来ます。建築中のビル群も夜間は必要最小限の機能照明のみの点灯となるため、空がとても広く感じました。

2005年にオープンした芝浦工業大学の豊洲キャンパスも、大勢で押しかけたにもかかわらず、見学させて頂くことが出来ました。最上階からは豊洲の中心地を一望することができます。

様々な機能、要素が同時期に立ち上がっている渦中の新しい街は、一見殺風景で、まだ人々や暮らしの香りの不在を常に感じさせます。しかし、都市計画が綿密に施され、コンパクトなエリアに多種の様々な施設が配置された街は大きな可能性に満ち、数年後に街が一旦完成を向かえた時には、光の景色としても最新の都市の姿を我々に見せてくれるのではないかと予感させるものがありました。

■ベイエリアから見る風景

ララポート裏にある海上公園は晴海側が一望できる空間が広がっています。水辺に向かって左手にはガスの科学館、その奥にはゆりかもめの高架があります。夕暮れ以降、ガスの科学館は内包する光のボリュームと鉛直面の光を纏って、静かながらに強い存在感で水辺に現れます。まだ周辺が開発中ということもあり、ゆりかもめの走っている様子は海上公園からよく見ることが出来ます。夜空や高層ビルを背景に発光体がすうっと走っていく様子は、新鮮な風景でした。

水辺正面には、晴海大橋とその奥にレインボーブリッジが見えます。晴海大橋は照明がとくに施されておらず、晴海ふ頭側にもアイキャッチとなるような光がないため、現状では華やかさに乏しい水辺の風景です。海上公園には晴海側に大きな光のオブジェがありますが、公園全体に施されている光の量やその他設置されているもののボリュームと釣り合いが取れておらず、未完成の風景という印象を持ちました。

もしかすると隅田川の花火大会がよく見えるロケーションかもしれませんが、これだけ水辺の空間がしっかりと確保されているベイエリアで、華のある景色が一年に一度しか見ることが出来ないというの寂しい気がします。これからどんどんと増えていく豊洲に住む人々に愛される水辺の風景の計画が待ち望まれます。

(村岡 桃子)



海上公園デッキよりガスの科学館とゆりかもめ



ららぽーと裏で記念撮影

第34回探偵団サロン @ヤマギワリビナススペーススタジオ

2007.3.5

■豊洲街歩き報告

岡本団員より2月16日に行なわれた豊洲街歩きの報告がありました。豊洲の成り立ちや地区の照明ガイドラインなど、豊洲地区の全容を把握する上でわかりやすく、照明についても突っ込んだ内容の多い探偵団として質の高い調査報告でした。当日の街歩きに参加した団員からは調査場所（ららぽーと豊洲の照明、街区の道路照明、集合住宅の光、芝浦工大の光、オフィスの光、ベイエリアの夜景）についての意見が飛び交い、これまでにない議論の場として参加していなかった団員も真剣に聞き入っていました。

今回のサロンはヤマギワ株式会社のご協力により、東京・秋葉原の電気街に位置するヤマギワリビナスのスペーススタジオをお借りして行われました。広々とした開放的な空間で美しい家具に囲まれながらのサロンとなり、来場者はリラックスして発表に聞き入っていました。



秋葉原・電気街に位置するヤマギワリビナススペーススタジオ



リラックスした空気の中で面出団長が語る



豊洲街歩き・ポール灯を調べる団員たち

■都市照明調査報告 新宿

小川団員より昨年11月17日に行なわれた都市照明調査「新宿」の報告がありました。新宿靖国通りのファサード調査、変わり行く駅出口の記録、高所からの撮影を柱としながら靖国通りで当日朝から翌日の明け方までかけて行なわれた定点観測の成果の発表もあり、1日で行なわれた調査とは思えないほどのボリュームでした。もちろん新宿という場所柄もあり、小川団員は危険な目にもあったようです…。

■都市照明調査報告 仙台

矢野団員より昨年12月19日から3日間で行なわれた都市照明調査「仙台」の報告がありました。市民の手で作り上げられた東北地区最大規模のイルミネーションイベント「SENDAI 光のページェント」の圧倒的な光の集積に、参加者の方々も驚きを隠せなかった様子。また、六本木ヒルズ・けやき坂のイルミネーションの取り付け方と比較し、ページェントの配慮の乏しさを嘆きながらもまだデザインする余地の残されたイベントであるという希望的な感想もありました。

■TRANSNATIONAL TANTEIDAN FORUM2006 報告

田沼団員より昨年11月22日にシンガポールで行なわれた Transnational Tanteidan Forum 2006 の報告がありました。今回で5回目を迎えるフォーラムのテーマは「Façade Lighting」。今回初めて行われたベオグラードの調査報告では、フォーラムの参加者もそれまで体験したことのない未知の光環境が発表されました。参加各国の発表を見た田沼団員は、改めて東京が多様な光に囲まれていることを実感したようです。

■URA 展覧会報告

山本団員より Transnational Tanteidan Forum の開催時期に行なわれたシンガポールの都市照明に関する展覧会“Lighting up our City Centre”の報告がありました。会場では提案の内容に沿って様々なブースが作られ、演色性の違いによるものの見え方やランプの種類など、照明には欠かせない要素を簡単に説明しながら一般の来場者にもわかりやすい展示だったようです。



銀座街路灯コンペについてコメントする戸恒団員

■銀座街路灯コンペ報告

田沼団員より昨年の暮れにかけて行なわれた、銀座・京橋・日本橋 / 中央通り照明デザイン国際協議実行委員会主催による中央通り道路照明灯コンペについて、どのような内容だったのか報告がありました。最終審査に勝ち残った5案のデザイン案をスライドで見ながら意見が交わされましたが、サロンに出席された団員の中でコンペに参加され、惜しくも落選してしまった戸恒団員からは実際にコンペで苦労した点や曖昧なコンペ要綱自体についてのお話を頂きました。日本を代表する通りの道路照明灯。完成した暁にはぜひとも見学に行きましょう！

(矢野 大輔)

【照明探偵団の活動は以下の 21 社にご協賛頂いております。】

ルートロンアスカ株式会社
岩崎電気株式会社
カラーキネティクス・ジャパン株式会社
松下電工株式会社
ヤマギワ株式会社
山田照明株式会社
マックスレイ株式会社
ニッポ電機株式会社
エルコライティング株式会社
ウシオライティング株式会社
株式会社フィリップスエレクトロニクスジャパン
トキ・コーポレーション株式会社
東芝ライテック株式会社
大光電機株式会社
株式会社 MARUWA
コイズミ照明株式会社
マーチンプロフェッショナルジャパン株式会社
ルイス ポールセン ジャパン株式会社
株式会社遠藤照明
湘南工作販売株式会社
株式会社ウシオスペックス

